



あの震災を 特集 忘れない

平成23年3月11日、各地に未曾有の被害をもたらした東日本大震災からまもなく3年になろうとしています。この3年の節目に、市では本市の被害状況や震災対応などをまとめた記録誌の作成作業を進めています。震災の対応に追われた人や過酷な経験をした子どもたち、そして、震災をきっかけに新たな絆ができた人など、あの時、震災に向き合った人たちが、どのように行動し、そして何を感じたのか。記録誌に寄せられた体験談を中心に、あの震災を振り返ります。(2~15ページ)

● 避難所の開設・運営に奔走①

学校が隣町住民の避難所に 住民らの協力で乗り切る

津波被害の隣町から峠越えの 避難者が着の身着のまま

子どもたちを保護者に引き渡し、地震で散乱した机や椅子の片付けをして一段落ついた頃、戸締まりのために体育館へ向かいました。午後4時30分頃だったと記憶しています。夕暮れ迫る中、6~7人ほどの人々が校庭を横切って私の所に近づいて来ました。

グループのリーダーらしき男性が、「助けてください。ここに避難させてください」と声を掛けてきました。「どうしたのですか」と尋ねると、「自分たちは(志津川の)戸倉から来た。志津川は津波で全滅した。荒町地区(横山峠を志津川方面に向かって下ったす

ぐの地区)に逃げたが、その荒町も危ない…。歩いて峠を越えて逃げてきた」とのことでした。帰り支度をしていた職員にお願いし、すぐに体育館に避難者を受け入れる準備をしました。

2年前の豪雨災害の教訓生きたる 地区輪番制の支援体制が確立

ほとんどの方が着の身着のままの状態でした。まず、少しでも体が暖まるようにと、家庭科室と職員室のガスコンロでお湯を沸かしてお茶を用意しました。

この間に体育館の床にブルーシートを敷きました。その上にあるだけの運動用マットを並べ、床からの寒さを防ぐようにしました。保健室にある毛布

最大震度6強を記録 内陸部でも甚大な被害

平成23年3月11日、午後2時46分に三陸沖を震源に発生した東北地方太平洋沖地震では、本市の米山、南方で最大震度6強を記録。4月7日に発生した宮城県沖を震源とする余震と合わせ、内陸に位置する登米市にも大きな被害をもたらしました。市内の人的被害は、死者28人(市外死亡者19人、災害関連死9人)、行方不明者4人、負傷者52人。住家と非住家の被害は、住家の全壊201棟、大規模半壊441棟、半壊1,360棟、一部破損3,364棟で、非住家被害は795棟。全国では死者18,703人、行方不明者2,674人(被害状況は平成25年9月1日現在)。



▲地震で崩落した東和総合運動公園



市教育委員会
生き生き学校支援室
千葉 整 さん
(当時：横山小教頭)

やタオルケットなども可能な限り配りました。しかし、時間の経過とともに、それだけのスペースと物資では対応できないほどの避難者が集まって来ました。

3月11日の夜には、30人近い人たちが体育館に避難していました。その後も

助けを求める人は後を絶たず、12日は200人を超える人たちが体育館に集まりました。

横山地区では、平成21年の秋に豪雨による小学校での避難所開設を経験しており、地区住民による支援体制が確立されていました。騒ぎを聞きつけた